

梅鶯仏教壮年会報

第111号
2013年
10月20日

いのちの理由（さだまさし作詞）――抜粋――

私が生まれてきた訳は
父と母とに出会ったため
私が生まれてきた訳は
きょうだいたちに出会うため
私が生まれてきた訳は
友達が生まれてきたため
愛しいあなたに出会うため

私が生まれてきた訳は
何処か誰かに傷つけられて
私が生まれてきた訳は
何処か誰かに傷つけられて
私が生まれてきた訳は
何処か誰かに救われて

○平和のつどい

（近江仏教会主催・梅鶯仏社協力）

十一月十六日（土）

○親睦旅行

十一月二十三日（日）

二十四日（日）

○報恩講

スリランカ（旧セイロン） 世界遺産の仏教遺跡を訪ねて⑤

副会長 森勝昭

お釈迦様のご成道の聖地ブツダガヤから、アシヨカ王の王子により伝えられたスリマハ菩提樹を参拝。



現在のブツダガヤ大塔の菩提樹は、再びこの地から株分けされたもので

す。この町から、ピルマ、タイ、カリンボジアなどへと南伝仏教が広ま

リ途中であうナカブツダは一枚岩から削

りだされた美しい立仏像に参拝する。

仏この立像は5世紀頃の彫像です。

紀菩提樹の木の下で瓜生津先生よりお話を

をして頂きました。

北伝仏教（大乘仏教）は、インドからヒマラヤを越えてシルクロ

ードを通り中国、朝鮮半島、日本へ。

南伝仏教（小乗仏教）、今は上座部仏教といっていますが、イン

ドから紀元前三世紀頃にセイロン



に伝来した。アシヨカ王の王子マヒンダが伝導師としてこの島へ来られています。

9年（昭和24年）に中華人民共和

9年（昭和24年）に中華人民共和

の昭和34年に第14代ダライマ

ラはインドに亡命して、ダライ政

権が崩壊した。

に、こんなお話を車イス

義のようになされた。

聴いていました。

には必ず寺院でも、境内

と涅槃像を祀っています。

涅槃像はブツダがインドのクシ

ナガラで入滅された時の寝姿で

す。

目をばつちりと開き、黒目でや

さしくこちらを見ておられる顔

は、80歳の顔でなく、まさしく15・16歳の顔としか思



題材法話

子の母を
おもいうがごとくにて
衆生 仏を憶すれば
現前 来 仏を憶すれば
如来を拝見 うたがわず

○同体の慈悲
阿彌陀様の私達への働き
には、大きく二つあり、一
つは「智慧」の働きで、も
う一つは「慈悲」の働きで
す。

智慧の働きとは、私達の
愚かさを破って、間違いを
正してくださる働きです。
そしてもう一つの慈悲の
働きとは、愚かな私をその
まま抱き取って下さる働き
です。

そこでよく、智慧の働き
を父親にたとえ、慈悲の働
きを母親にたとえます。
「正しく生きよ。立派に
なれ」と励ます父親の厳し
い一面を「智慧」の働きと
するならば、「愚かなまま
でいい。だめなまま
でいい。おまえの悲
しみは私の悲しみだ
から」と、一緒に涙



する母親の心が「慈悲」の
働きです。

現在、私たちが忘れかけ
ている大事な心は、この慈
悲の心に通じるのではない
でしょうか。

阿彌陀様の慈悲の心は、特
に「同体の慈悲」とよび、
「人の悲しみを我が悲しみ
とする」という心です。

なく、一方的な同情心などでは
なく、その人と共にある慈
しみの心です。

○子を思う母の心
ある50歳くらいの女性
のお話です。

病氣療養中の実家のお母
さんが、いよいよ病態が悪
くなつて入院された。では
お医者さんの見立てでは
そう永くはないという。

そこで、実家の跡継ぎで
あるお兄さんをはじめとす
る三人の兄妹が相談して、
順番に病院に泊まり、付き
添いをする事となった。

ある日、その女性がお母
さんの病室に泊まったとき
のことである。

その女性はずつ
と起きて看病し、
とは思っていたので



すが、やはり昼間の疲れも
あり、夜も更けてお母さん
も落ち着いている様子なの
で、お母さんのベットの横
に布団を敷いて横になった
そうです。

そうしたら、なにか子供
の頃を思い出すような感じ
になつて、ついうとうとし
てしまつたそうです。

とところが、なにか自分の
布団をまさぐられているよ
うな感じがして、ふと目を
覚ましてみると、一生懸命
にお母さんがその女性の布
団を引っ張ろうとしていた
というのです。

最初は、病態が悪くなつ
て、お母さんが私をなんと
か起こそうとしていたのだ
と思い、慌てて起きようと
したのだ。そうですが、こ
ろがどうも様子が違うとこ
ろがない。

そこでよく見ていると、
自分が眠っている間にはね
のけてしまつていて、掛け
布を、お母さんがべ
ットの、上から手を伸
ばして、一生懸命に
掛け直そうとしてい

掛



るんだということが分かつ
たのだそうです。

その方は声も出なかつた
そうです。

病気で苦しい我が身であ
りながら、我が娘の体の
方を案じる。

娘が風邪でもひきはしな
いかと心配をし、病床から
手を伸ばして布団を掛け直
そうとする。

○これが母親なのです。
言葉も掛けることが出来ず
に、ただただ布団の中で、
「お母さん」と声を出さず
に呼び続け、涙したそうで
す。

実はこれが阿彌陀様の心
に通じる「同体の慈悲」な
のでしよう。

「21世紀は心の時代」
と叫ばれていきます。

縁として、こういつた「慈
悲」の心を、今一度ともに
思い返すことができればと
思うことです。

その本日はようこ
そのお参りです。



門徒一回忌法要
住職法話